

地域包括ケア時代の 薬局・薬剤師の役割



ファルメディコ株式会社
大阪大学大学院医学系研究科
統合医療学寄附講座
医師・医学博士 **狭間 研至**

第21回 “終わらせること”から始まる薬剤師業務のイノベーション

現在の働き方にジレンマ抱える薬剤師 モノからヒトに専念する仕事に変えるには

今、薬剤師の中が変わろう、変わりたい、変わらなくては、という方が少しずつ増えているのではないかと思います。これは薬局・病院にかかわらず、臨床業務に従事している薬剤師であれば、現在の薬剤師の働き方やあり方に、少なからずジレンマを抱えていることが原因ではないかと考えています。

現在の業務で薬剤師に求められているのは、「薬を準備し、説明すること」に集約されてきたと思います。これは大切なことですが、機械化やICT化によって、薬剤師の仕事が表面的には代用可能に見えてきているのも事実です。

薬剤師としての専門性をどこで活かすか、薬剤師が薬というモノに専念する仕事ではなく、患者さんというヒトに専念する仕事に変えていくためにはどうすればよいのか、ということに悩んでいる方は少なくないと思うのです。

それを変えようとして、いろいろな学会に所属し、勉強して認定薬剤師を目指したり、地元や時には遠方で開かれる講習会やセミナーに出席して、自分の持つ知識や技術の向上を目指したりするのですが、やはり、今の薬剤師の立ち位置という構造的な問題に悩むことがあるのではないのでしょうか。

そんなときに申し上げているのは、自分が調剤を担当した患者さんについて、お薬をお渡しした後もフォローし、効果や副作用の有無をチェック、もし好ましくない状況が出ていれば、自分がお渡しした薬によって起こっている可能性がないかどうかを考えて、なぜそのようになったのかを医師に伝えるということをしてみましょう、ということです。これを見ると、薬剤師が薬学部で学んできた薬理学・薬物動態学・製剤学といった知識を活用することができ、薬剤師が発言する内容が、いわゆる「薬学的見地に基づく」ものになる

とともに、それらの介入が患者さんの病状改善につながることも多くなり、薬剤師の悩みが一気に解消されていくことがあるからです。

対物業務の省力化・効率化が必要 業務を今一度ゼロベースで見直そう

とはいえ、現在の薬剤師の業務は多忙を極めています。お薬を出した後をフォローするというたった一つのことですら取り組む余裕がないというのが現状だという方も多いでしょう。しかし、そんな状況を押しても薬剤師としてやるべきだ！ と取り組んでいくと、その薬剤師はだんだん疲弊していくとともに、現在の調剤報酬制度で単に仕事量を増やすだけだと、採算性が担保できなくなり、結果的に、その取り組みは頓挫してしまいます。

では、どうすればよいのか。私は、今の薬剤師の業務を今一度ゼロベースで見直してみて、しかるべき機械化と非薬剤師スタッフの活用を通じて、薬剤師が関係する対物業務の省力化と効率化を図ることだと考えています。その結果として、薬剤師の気力と体力と時間を温存すること、平たく言えば、薬剤師が若干ヒマになるという状況を作ることが大切です。

私が自分の薬局で行った経験によれば、そのような状況を作った時に、サボったり業務と関係ないことをする薬剤師は、一人もいませんでした。その余裕を使って、患者さんのそばにいて、服用後の状況を確認し、薬学的見地からその状態を評価して、医師や看護師、患者や家族に書面も用いてフィードバックするという業務にシフトし始めます。

「イノベーションとは、始めることではなく、終わらせること」ということを、作家の岩崎夏海さんがおっしゃっていましたが、まさに、今の薬剤師にイノベーションを起こすためには、現在の業務の一部を終わらせることが大切なのではないのでしょうか？